

永井荷風『停電の夜の出来事』の上演資料

出口逸平

今回ここに紹介するのは、雑誌『演劇界』昭和二十四(1949)年五月号に掲載された『停電の夜の出来事』の舞台紹介記事「舞台テレビー停電の夜の出来事」(資料1)とその稽古写真二枚(資料2)である。戯曲『停電の夜の出来事』はカストリ雑誌『小説世界』昭和二十四年四月号に発表され、三月二十五日から四月七日まで劇団『美貌』により浅草大都劇場で上演された。戦後風俗の中の恋愛模様を、軽演劇の手法で描いた永井荷風(1879～1956)の「浅草向脚本」^(註1)である。

資料1 舞台紹介記事

「舞台テレビー 停電の夜の出来事」 解説

『演劇界』(1943～)の前身の『演芸画報』(1907～1943)には「芝居見たまま」という連載記事があった。衣装・小道具から舞台装置、また演出や役者の所作といった舞台のあれこれを「見たまま」に、できうるかぎり克明に文字で再現して、生の舞台に触れられなかった多くの読者の要望に応えようと企画された。川尻清潭・三島霜川・渥美清太郎といった見巧者によって、三百回近く書き継がれてきた『演芸画報』の名物記事であった。この「舞台テレビー」は題名からして、まさに「芝居見たまま」の戦後版にあたる。

この紹介記事に署名はないが、おそらく『演劇界』編集部の手になるものと思われる。また台詞や描写の類似からみて、筆者は明らかに『小説世界』に載った荷風の戯曲を読んだ上で、実際の舞台に接しているこ

とがわかる。大手の新聞雑誌にほとんど取り上げられることのなかった当時の浅草軽演劇、その舞台の雰囲気伝える貴重な資料となっている。また記事末尾の配役一覧によって、主要俳優のみを記す新版『荷風全集』第十九巻(1994年11月 岩波書店)の解説を補うことができる。

荷風脚本と紹介記事を読み比べてみると、全体として大都劇場の舞台が意外なほど脚本に忠実に演じられたことがわかるが、それでもいくつかの相違点が見出せる。たとえば脚本には旦那の芹沢が大阪出張のため、妾の愛子を振り切ってそそくさと家を飛び出す場面があるが、実際の舞台では愛子の色香に迷って「一泊する」と言い出す芹沢を、愛子があわててなだめすかして出張に送り出すというコミカルな形に改められている。また最後の賊と愛子との愛欲シーンでは、より大胆でエロチックな所作が増やされている^(註2)。これらは「笑いとエロチズム」という浅草軽演劇らしい現場感覚を、荷風の脚本にうまく生かした演出だったといえよう。

資料2 『停電の夜の出来事』舞台稽古写真 解説

キャプションには「永井荷風氏は、近頃よく浅草のレビューの楽屋を訪問していたが、今度『停電の夜の出来事』三場を執筆、小川丈夫氏(元オペラ館支配人)の演出で上演。その稽古に立会った」とある。『断腸亭日乗』昭和二十四年三月二十四日条に「午前小川氏

(注・小川丈夫) 来り大都劇場正午十二時より舞台稽古なりと云ふ。共に京成電車にて浅草に行く。稽古四時半に終る。小川氏と共に帰る」とある。ほかに稽古に立ち会った形跡はないので、写真の撮影時期は公演前日の三月二十四日と推測される。

左右二枚の写真のいずれも左端にいるベレー帽の男が永井荷風である。小門勝二『浅草の荷風山人』^(註3)に「荷風はむらむらと芸術的意欲が燃え上ったのだろう、いきなり靴のまま舞台にかけ上がってね、『それでは感じができませんよ、もう少し手を中の方に入れなくちゃ……そう、そうですよ』と小川氏のお株を奪ったかたちになってしまったよ」とあるが、まさに写真の荷風も靴のまま舞台に上がり、俳優に演技指導しているように見える。

荷風の隣のハンチングをかぶった俳優は、若き賊を演じた丘龍児(1909～1977)である。広島出身で戦前はエノケン一座に、戦後はのちに柳家金五楼一座に参加している^(註4)。

女優の高杉由美(生没年未詳)は京都生まれで昭和二十三年頃に上京、発禁小説を劇化した『H大佐夫人』の舞台に出演して、一躍注目を浴びた。荷風は彼女にぴったりのはまり役として『停電の夜の出来事』の主人公愛子を書き下ろしたという^(註5)。

また左写真の右端で台本を持っているのが、演出家の小川丈夫(生没年未詳)である。荷風が浅草オペラ館に通い始めた昭和十二(1937)年頃からの交流は、小川のエッセイ「浅草ばなし」^(註6)に詳しい。

註

- (1) 『断腸亭日乗』昭和二十三年十二月五日条に「日曜日。晴。暖。浅草向脚本停電の夜の出来事(一幕)執筆。」とある。なお『断腸亭日乗』の引用はすべて新版『荷風全集』(岩波書店)による。
- (2) 『小説世界』の編集者だった吉田暎二は、旧版『荷風全集』

第二十七卷月報(1965年3月 岩波書店)に載せたエッセイ「『停電』のことなど」で「妾が若い賊に迫まれて、肌もあらわにあとずさりをするところで、ほどけた伊達締が、座敷から次の間へ蛇のように長くのびていたらいいと私がいうと、(補・荷風は)『そうそう、ずっとこう……絵にもありますね』と歩きながら手まねまでして小川氏に説明する。絵にあるというのは、浮世絵の秘画の場面を思い出しのことらしく、浮世絵の研究をしている私が当を得た忠言をしたと、いかにも嬉しそうであった」と記している。

- (3) 1957年 東都書房
- (4) 『日本芸能人名事典』(1995年7月 三省堂)による。
- (5) 小門勝二『荷風踊子秘抄』(1960年10月 有紀書房)・同『永井荷風の生涯』(1972年11月 冬樹社)による。
- (6) 旧版『荷風全集』第二十一卷月報(1963年10月 岩波書店)所収

資料1 舞台紹介記事

「舞台テレビー 停電の夜の出来事」

停電の夜の出来事

原作 永井荷風

☆劇団「美貌」 浅草大都劇場

☆舞台テレビー

演出 小川丈夫

第一場

幕あく……と、舞台は東京西部の郊外にある、或る住宅の四畳半と六畳の間つづきの座敷である。下手の石柱の門を入ると玄関の格子戸口で、それに並んで更に下手に勝手口へ通う木戸がある。玄関を入り、二枚立の障子を開けると上手が六畳の間で、正面奥に台所へ通う廊下が見え、壁際にタンス、鏡台衣桁が置かれ、襖を境に更に上手は四畳半で正面奥はガラス戸の出窓になっており、そこから、十月の午後の日かげが

明るくさし込んでいる。

その出窓の軒に干されてあった奥様の長襦袢と夜具を、女中の栄子を取り込んでいる。裾短のワンピースにエプロン姿の栄子は、まだ十七八の小娘である。そこへクリーニング屋の若い者山岡が洗濯物を抱えて現れ、声を掛けたが返事がないので、門を入り台所へ消えて行った。そして庭へ廻ると栄子が伊達締を庭に落して、半身を窓外に突出し、丸々と発達した尻を突あげて、取ろうとしている栄子を見て、伊達締を拾いあげてやった。山岡と栄子とは、かねてから恋人同志で、奥さんが留守だと知ると、山岡は栄子を抱いて接吻した。そして奥さんの長襦袢に目を止めると、山岡は長襦袢を抱えて夢中に匂いをかぎ、

「奥さんの匂いがする。奥さんの体臭だ。」

栄子はそれをみると癪にさわって、
「ナニサ、白粉とクリームの匂いじゃないの。わたしだって長襦袢くらい持つてるわよ。」と長襦袢をひたくり、「今日家へ行くから長襦袢持ってくるわ。」

栄子が泊りがけで家へ帰ると知ると、山岡はホテルへ泊りに行こうと、栄子を誘った。

そこへ奥さんの愛子が、ワンピースに下駄ばきで、湯道具を持って銭湯から帰って来たので、山岡は慌てて姿をかくした。まだ二十四五の愛子は奥さんと呼ばれてはいるが、実は芹沢という男の妾であった。栄子は愛子の顔を見ると家へ帰ることに承諾を得て、やがて着替えをすると、門口で待っている山岡といそいそと去って行った。愛子は鏡台の前に座ると、化粧をはじめた。そこへ巡査と町内の世話人がやってきて、盗難予防の注意書を置いて行った。それと入れ違いに、洋裁師のスマレが訪れてきた。スマレは座敷へ通ると、早速愛子から注文された羅紗地をひろげてみせ、愛子は「内の旦那ときたら、冬でも夏みたようにスカートのうんと短いのが好きなのよ」などと言いながら、布地を身につけ鏡をのぞきこみ、やがて値段の交渉が済むとスカートをぬぎ、シュミーズ一枚になって、裸身

の寸尺をスマレに取らせはじめた。

そこへ旦那の芹沢がやって来た。芹沢は五十七八で半面に火傷のあとがあり、半白の禿頭で、風采の揚らない男である。彼が座敷へ上ってくると「うれしいわ、あなた」とさもうれしげに愛子は芹沢の首へかじりついた。芹沢は、下着一枚の愛子の姿を、好色に燃えた眼を細めてまじまじと眺めた。その顔をうかがうと愛子は早速、二万八千円の洋服と五万円のオーバーをねだりはじめた。

「二万八千円にまた五万円。七万八千円か。ほしいとなると、女はお金の値打がわからなくなるから困るよ。」

芹沢は渋い顔をしたが、承諾をするもしないもなかった。愛子はスマレにさっと注文した。

「あなた、お金、半分でも渡してやって下さい。」

「今日はこれだけしかやれない。」

「二万円。これだけなの。」

「実は今晚急に大阪へ行く用事ができたんだ。用の都合で二三日来れないかも知れないから今日は無理をしてお前の顔だけ見に来たんだ。お金は大阪から送ってやるから心配しないがいい。」

愛子は仕方がないといった顔で、札束をスマレに渡した。金を受取るとスマレに渡した。金を受取るとスマレはいそいそと去って行った。愛子はウイスキー瓶とグラスを運んでくると甘えて、

「あなた、今日はゆっくりして行けないの。泊っていらっしやいよ。わたし一人じゃつまらないもの。」

「お前にそんな悲しい顔をされると、おれはどうしていいのかわからない」と愛子を膝の上に抱きよせ、強く頬ずりして「お前、どうしておれが好きなんだ。お前とわたしとはいくつ年がちがうと思う。三十違うんだぜ。」

「わたしは若い人は嫌いなよ。どうしても四十から先の人でなくっちゃ面白くないわ」

「しかし、顔が皺だらけで頭が禿げていちゃあんまりぞっとしないだろう。」

「顔だの様子だの、そんな事はほんの初の中だけよ。見馴れちまえば、いいも悪いもなくなってしまうものよ。まア、瞥えて見ると、そうねえ、はばかりみたようなもんだわ。」

「はばかりって、便所のことか。」

「毎日慣れっこになると、自分の家の便所なら少しくらい汚くっても何ともないけれど、よその家のだと気味がわるくって、そうは行かないわ。」

「何だ。便所と男と同じように思ってるのか。」

膝の上にしなだれかかって、ウイスキーグラスをなめながらの愛子との語らひは、たわいもないものであった。けれど芹沢の心はこよなき楽しさに充たされていった。彼はこの楽しさを振り棄てて、大阪に発つことが厭になってきた。

「今夜泊ってゆくよ。」

愛子は驚いた。大阪へ行くときいて、ホッとした愛子の心は、あわてだした。

「あら、いいのよ。あたし、淋しいくらい我慢できるんですもの。」

「お前に出来ても、わしは出来ないよ。一寸向うの部屋へ……」

芹沢は欲情に堪えられなくなったのか、そう言いながら、四畳半の方へ立とうとした。愛子は一層あわてて、それを引止め、なだめすかすと、やっとオーバーを着せ、カバンを持って玄関へ送り出した。芹沢は如何にも心残りの面持ちであったが、愛子を強く抱いて接吻すると、思いあきらめて去って行った。芹沢の姿が見えなくなると、愛子は馬鹿馬鹿しさがこみあげてきて、鼻先で笑い、座敷に戻って、チャブ台へ肘をつくくと、大きなアクビをして、

「御妾商売も楽じゃアない。心にもないお世辞言ったり、甘ったれてみたり、いい加減口がくたびれてしまう……」

とつぶやきながら、ものうげに傍の新聞を取り、よみかける。が、暮れやすい秋の日はいつしか陽が落ち

て、あたりはもう暗くなっていた。愛子は立上って電灯のスイッチをひねった。が、電灯はつかない。停電である。

「また停電だ。これじゃ御飯もたべられないし、寝るより仕様がな。」

かすかに半鐘の音が聞えてきた。火事か泥棒騒ぎでもあるらしい。愛子はローソクに火をつけ、窓や門口の戸締りをして、四畳半に夜具を敷くと、長襦袢に着替え、タンスの上に置いた紙入と懐紙とを取り、紙入を枕の下に、紙をふところに差し込んで、ローソクを吹き消し、夜具の中に入った。

半鐘の音はいつしか止んでいた……。

第二場

夜——ほのかに、樹々が浮かんでいる、月の明るい夜である。静かに歌が聞えている。

陸軍少尉の軍服を着た青年の手にひかれて愛子が静かに歩いてくる。和服姿の愛子は、まだ十八九の若い女性である。じっと月を仰いでいた青年は、やがて感動に打ちふるえながら、

「愛子さん。初てあなたと接吻したのも今夜のような、いいお月夜の晩でした。」

「ええ。わたしも忘れません。一生涯で一番幸福な時でしたわ。あなた。わたし、どうしてもお別れしたくないんですの。」

愛子は青年の胸にすがって、むせび泣いた。青年も同じ思いであった。しかし、二人は別れねばならなかった。

「お互に勇気を出して、もう一度平和と幸福の来る日を待ちましょう。僕はきっと帰って来ます。死なずにきっと帰って来ます。」

「ええ、二年でも三年でも、何年でも、愛子はあなたのお帰りを待っています。」

二人は固くかたく誓い合った。そうして別れを惜し

む二人の前を、兵卒の服を着た田舎の男とその妻が通りかかった。妻の腕には赤子が抱かれていた。

「まだすこし時間があるから、おっかさんのお墓参りをして行こう。坊やは能く寝ているな。おれにも少し抱かせてくれるよ。」

「坊や、お父さんは戦争に行くんだよ。もう帰って来ないかも知れないんだよ。」

そう言いながら、妻は赤子を夫の方へ渡した。夫は赤子を受取ると、泣き出すのをいぶりながら去っていった。愛子はじっと見送った。別れねばならないのは、愛子たちだけではなかった。

「あなた。今になって見ると私達子供のなかった方が、どんなに幸だったか知れませんねえ。」

愛子はしみじみと言った。青年の胸には、戦争に対する限りない憎悪が燃えてきた。

「人間の世界から戦争のなくなるのはいつの代のことだろう！」

「あなた！」

感極って青年の胸にひしと顔を押しあてると、愛子はふたたび、声をあげて泣ききずれた。青年はその愛子を、やさしくなぐさめいたわりつつ、抱きかかえるようにして去って行った。月は相変らず、明るく、静かに、樹々を照らしていた。やがて、半鐘の音が次第に近く、犬の吠える声が、しじまを破って不気味に聞こえてきた……。

第三場

もとの座敷。第一場より何時間か後のこと。四畳半に寝ていた愛子は、ハッと眼を覚まして寢床から起き上った。夢を見ていたのである。青年将校との別れの……。だが、どうして今時分あんな夢を見たのか、愛子には不思議でならなかった。

「むかしの夢だわ。過ぎ去ったむかしの夢はもう帰って来はしない。」

愛子はつぶやくと、また横になって眠った。半鐘の音はかすかになり、夜の更けた気配があたりにみなぎっていた。と、正面の障子がそっと開かれ、一人の男がヌッと現れた。烏打帽をまぶかに冠り、黒のスエーターを着て、懐中電灯を持ったその男は、色白のすっきりとした二十五六の青年である。彼は部屋の様子を窺い、一步這入ろうとするが、その時、停電していた電灯がパッと点いたので、驚ろき、慌てて障子の蔭へ身をかくした。

愛子はふたたび眼をさまし、寝ながら巻煙草を吸い、枕元の雑誌を取って、読みはじめるが、間もなく顔の上へのせたまま、また眠りにおちて行く。男はふたたび障子口から現れ、鏡台のひきだしを抜き、つづいてタンスのひきだしを抜こうとするが、鍵がかかっている。電灯がまた消える。男は四畳半へきて枕屏風越しに、愛子の寝姿を見るが、やがて屏風をとりのけ、枕もとにしゃがみ、愛子の顔を、寝乱れ姿をじっと眺めていたが、次第に欲情にかりたてられてきて、ナイフを出し「おい、起きないか、おい」と夜具をまくる。と愛子の素足と白い肌が男の眼にしみるが、男はなおもナイフをつきつけて「金はどこにある。騒ぐとこれだぞ。」

びっくりした愛子は「ア、あなた」と立とうとするが、尻餅をつき、後じさりに身を引きながら「お金出します」と枕の下から紙入を取り出し「お金でも着物でもみんな出します。あなた、助けて下さい。命だけ助けて下さい。」

と必死に叫ぶが、賊はなおもナイフをつきつけ、じりじりと詰め寄ってくるので、愛子は尻餅をついたまま、六畳の方に後じさりして行く。そのうちに伊達締は解け、長襦袢の胸ははだけ、懐紙が落ち、裾は乱れて、なまめかしい姿になる。賊は、それをじっと見詰めながら、なおも一足一足詰め寄ってくる。愛子は腕時計をはずし、指環を抜き、差し出す。賊はその手をおさえグッと引きよせる。瞬間、長襦袢が肩からぬけ、

愛子はシュミーズ一枚になってしまう。その彼女を賊は寝床の上に倒す。

「後生ですから、殺さないで。」

愛子は賊の腰にすがりつき、顔を仰向けにして、あわれみを請うた。じっと見下す賊の心は怪しく乱れてきた。覚えず手にしたナイフを落すと、愛子を荒々しく抱きしめた。シュミーズは肩先からぬげ、愛子は半裸体になってしまった。

「おとなしくしている。取るものさえ取れば殺しはしない。」

「お願いします。」

愛子はまたも取りすがった。賊は愛子を抱きしめると、強く接吻した。永い接吻であった。やがて賊は愛子を放すが、チャブ台に腰をかけて「水、一杯くれ。」
「そこにウイスキーがあります。」

愛子はチャブ台の上のグラスにウイスキーをついで出し、自分も別のグラスについで一口に飲みほした。

「お前、この屋のマダムか。」

「ええ」と愛子はまた飲んだ。

「外に誰もいないな。」

「誰もいません。わたし一人っきりです。」

「そうか。仕様がなと思って諦めたんだな。そんなら、おれもそのつもりだ。いいか、今夜はゆっくり腰を据えるぜ。」

賊は帽子を投げ捨て、チャブ台の傍にあぐらをかくと、膝の上に愛子を引きよせた。ウイスキーが身体に廻ってきたのか、愛子は気持が次第に落ち着いていくのを感じた。

「かまいません。どうせ、人のおもちゃになってる身体ですもの。わたしは実はあなたみたような、若いきれいな人の腕に、じっと抱かれてみたかったの。ゆっくり飲みましょう」

とグラスにウイスキーを注いで、「ねえあなた」と男の顔を見つめ、「どう見ても悪いことなんか、するような人じゃ見えないわ。」

愛子は賊に背を向けるように身体をひねってグラスを唇の方に持っていった。

「おれだって、泥棒するために生れて来たんじゃないからな。」

賊は、グラスをささげたなまめかしい愛子のポーズをじっと見つめた。そして愛子を引きよせると、思いのままに接吻した。愛子の手は傾き、コハクの液体はこぼれ、遂にはグラスも愛子の手から落ちていった。それは愛子にとっても、心からの感動の刹那であった。

「これァ返そうよ。しまっておけ。」

しびれるような接吻から身体を起すと、奪い取った紙入、腕時計、指環をチャブ台にのせ、賊は愛子の方へ押し返した。

「あら、どうして。それだけじゃ足りないの。あなたの言うもの、わたしの何もかも、みんな提供しようと思ってるのに……」

「だからよ。これはお前に返そうと言うんだ。実はな。泥棒は今夜が手始めなんだ。始めてやった晩に、酒に女に金と、三拍子揃って、こんなに訳なくやれるとは思っていなかったのよ。これァ、今夜が始めの終りにしろ二度やるなという謎じゃないかと、お前の体を抱きしめて、お前の顔を見詰めている中、おれはふいと、そんなような気がしたんだ。手荒な仕事は今夜かぎり止めにしよう。駄目だ。おれの体にゃまだ人情らしいものが残っているんだらう。」

賊はしみじみとそう言って立ち上った。その時半鐘の音が俄に烈しく起り「泥棒泥棒」と叫ぶ男女の声、バケツを叩く音などが騒々しく聞えてきた。賊は覚悟をきめて身構えた愛子はぴったりと賊に寄りそいがった。その時、台所の方から、汚れた柿色の仕事着を着た白髪の賊が狼狽した風で逃げこんで来た。

「この野郎」

白髪の賊を見ると、若い賊はいきなりとびかかって組みしってしまった。白髪の賊は組みしかれて観念し

たらしく、
「年貢の納め時だ。警察でも何処へでも引張って行け。
年を取っちゃあもういけねえ。」

「お前、いくつなんだ。」

「七十三だ。さア早く縛ってくれ。」

若い賊は白髪の賊から手を放した。

「おれが悪かった。おれも泥棒よ。」

「さ、早くお逃げ。」

愛子は白髪の賊の方へ紙入を投げてやり、窓のガラスを明けてやった。

「奥さん、すまねえ、一生恩にきるぜ。」

白髪の賊は愛子を拝み、涙をすすりあげて窓から逃げて行った。

「富田さん。起きていますか。富田さん。」

と巡査の声がした。賊は窓から逃げ出そうとした。が愛子は賊を止め、蒲団の上へ引っぱった。巡査の声はなお近づいてきた。愛子は賊に蒲団をかぶせ寝かせ、玄関へ出て行った。

巡「お宅には変りありませんか。」

愛「いいえ、別に……」

巡「ああ、そうですか。」

と巡査は去って行った。愛子は玄関の鍵を掛けると、ホッとして賊の方を見た。視線が合った。二人は同時に安堵の溜息をもらすのであった。そして、愛子は賊の方へ走り寄ると傍に座って「おお寒い」と身をちぢめた。賊は愛子の背に長襦袢をかけてやろうとした。と愛子はその手を握り、静かに肩から乳の上へ導いていった。賊はふたたび接吻しようと顔を愛子の方へ近づけた。が、愛子はそれをそらして、長襦袢の上に伊達巻をしめはじめた。賊は帽子を冠って、煙草に火をつけた。愛子は伊達巻をしめ終ると、懐紙をふところに入れ、賊の方を見た。賊も愛子の方を見ていた。じっと見合った燃えるような眼と眼。やがて、愛子は賊の頭から帽子をとると、しずかに電灯のスイッチをひねった。あたりは暗くなった。愛子は賊を引きよせ

ようとした。そのはずみに賊は倒れるように横になった。愛子の胸は高鳴った。そして賊の胸の上に覆いかぶさるように上半身を伏せると、愛子の燃えるような唇は、賊の方に、しずかに迫っていった……。

幕

配役

愛子	妾宅の女主人	高杉 由美
栄子	妾宅の女中	千代 笑子
スマレ	婦人洋裁師	高代チエ子
青年士官一人		鹿島 滋
兵卒一人		松田 武夫
兵卒の妻		桜 チエ子
芹沢	妾宅の旦那	森 八郎
山岡	クリーニング屋	福井 一郎
若き賊		丘 龍児
老人の賊		飛田 万里
巡査		池上 昌雄
町の世話人		田中 進介

旧字・旧仮名はおおむね現行のものに改めた。また明らかな誤字・脱字は訂正した。

資料2 『停電の夜の出来事』 舞台稽古写真

